

認知症者と家族の思い出共感支援システム

山崎 和紘[†] 泉 朋子[‡] 仲谷 善雄[‡]

立命館大学大学院 情報理工学研究科[†] 立命館大学 情報理工学部[‡]

1. はじめに

近年、日本は超高齢社会となり、認知症高齢者は増加傾向にある[1]。認知症では記憶障害によって、家族の思い出を忘れることや自身への失望や焦りを感じるが多くなり、精神的に不安定な状態になる。そして、このような認知症者を支えている在宅介護者は認知症に対する知識不足による試行錯誤や、要介護者から目を離せず、日々の介護によるストレスが溜まりやすい環境にある。また、認知症や介護に対する社会的認識の低さなど、周囲の協力が得られにくいことも介護者の抱える問題のひとつである。

本研究では認知症者にとって最も身近な存在である家族との思い出の想起支援を促し、共有することで、家族内のコミュニケーションの促進を図る。家族介護者は家族全員でその思い出を話題として語り合い、介護をひとりで抱え込むのではなく、協力して認知症に前向きに向き合う環境作りを支援する。昨年度の写真を用いた思い出想起・共有化支援に加えて、今回は、家族それぞれのライフストーリーを多様な観点から関連づけを行う。ライフストーリーの関連づけを行うことで家族と認知症者が同じ年齢の頃の経験の異同、配偶者が認知症者と出会う前の経験など、認知症者の思い出を軸に家族が共感しあえる場を提供するシステムを提案する。

2. 前段階研究

本研究の前段階として、「認知症者と家族介護者間における思い出想起支援」を実施した[2]。このシステムは、写真と写真に付随する様々な情報を用いて認知症者の思い出想起を促し、想起された思い出について家族内で語り合うことでコミュニケーションの促進を図る。思い出想起のトリガーとして利用する写真は認知症者に対しても視覚的に理解でき、家族の会話のきっかけになりやすいと考えられるためである。

実験の評価結果として、写真と付随情報を用いることで思い出想起が可能であり、コミュニケーションの促進に繋がることが確認できた。

このシステムの課題としては、想起支援機能として利用しているライフストーリーに関する機能が不十分ということが挙げられる(図1)。



図1 システム画面例

3. 関連研究

ライフストーリーを語ることで思い出の整理を行うことを回想法と呼び、既に多くの福祉施設や医療現場に導入されている[3]。

ライフストーリーを利用した研究としては、思い出構築閲覧システム your Story[4]がある。人が人生の中で必ずコミュニティ(小学校、友人グループなど)に所属してきたことに着目して、時間軸上にコミュニティを並べ、各思い出をコミュニティと関連づけて入力・整理を行えるライフストーリー作成システムである。

「your Story」の実験より、コミュニティ情報を用いて作成したライフストーリーは、思い出の整理や他者とのコミュニケーションの促進に繋がることが確認されている。そこで、本研究ではコミュニティ情報を用いたライフストーリーの有用性を生かし、認知症者やその家族を支援するシステムを提案する。



図2 your Story システム画面

Memory Sympathy Support System between Persons with Dementia and Their Family

[†]Kazuhiro Yamasaki, Graduate School of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University

[‡]Tomoko Izumi and Yoshio Nakatani, College of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University

4. システム提案

本研究では、認知症者の写真を用いた思い出想起支援に加えて、家族それぞれのライフストーリーを利用するシステムを提案する。各自のライフストーリーを時間的に関連づけることで、介護者である子供が自分と同じ年齢の頃の認知症者の経験を知ることで共感を得ることや、介護者である夫（妻）が夫婦になる前のある時点での互いの様子を知るきっかけを与えることができる。また、それぞれのライフストーリーから印象的な出来事を家族全員で話し合いながら抽出・統合を行い「家族ライフストーリー」を作成することで、家族としての共通の軌跡を辿ることができ、思い出の整理や共有が容易になる。

4.1 コミュニティ情報

ここでの「コミュニティ」の定義は、「人が特定の目的や場を継続的に共有する社会的集団」である。人生のある時点で所属していたコミュニティに関する情報の整理することで、思い出を整理するベースが構築できる。コミュニティ情報の整理を容易にするために「公(public)」、「私(private)」、「家庭(family)」の3つのカテゴリに分類する(表1)。

表1 コミュニティのカテゴリ分類例

学校・教育	幼稚園・小学校・大学	公(public)
職場	勤務先・アルバイト先	公(public)
趣味活動	習い事・部活	私(private)
生活	実家・家族の行事	家庭(family)

4.2 コミュニティ情報を用いたライフストーリー

まず、家族各々のライフストーリーを作成する(図3)。ライフストーリーの内容はコミュニティ名、具体的なエピソード、写真や場所で作成する。

以下にシステムの利用方法を示す。

- ① 各コミュニティに所属していたときのユーザの思い出を登録する。登録する情報はキーワード、エピソード、写真や場所である。
- ② 他のユーザのライフストーリーに、同一のコミュニティとキーワードがある場合には、類似の経験をしていると考えられるので、お互いのエピソードにコメントを付け、エピソードを相互に関連づける。当時の出来事を話すことで思い出想起が容易となり、コミュニケーションの促進に繋がる。また、お互いの経験の異同やその人の意外な一面を知ることができる。
- ③ 他のユーザのライフストーリーに、同一のコミュニティ名だが同一のキーワードがない場合には、コミュニケーションを促すために、

エピソード内容を隠したまま、どのようなキーワードが登録されているのかだけを通知する。写真が登録されている場合には写真を表示し、ユーザがエピソード内容を想像しやすくする。

- ④ 家族それぞれのライフストーリーからその人の特徴を表す出来事や印象的な出来事を抽出・統合して、家族ライフストーリーを作成する。家族ライフストーリーの空白部分を埋めることで、家族の軌跡を辿れる。
- ⑤ 認知症者が想起できない経験については、家族のライフストーリーをベースにシステムが想起支援のための雛形を作成・提示し、認知症者に確認・修正してもらう。

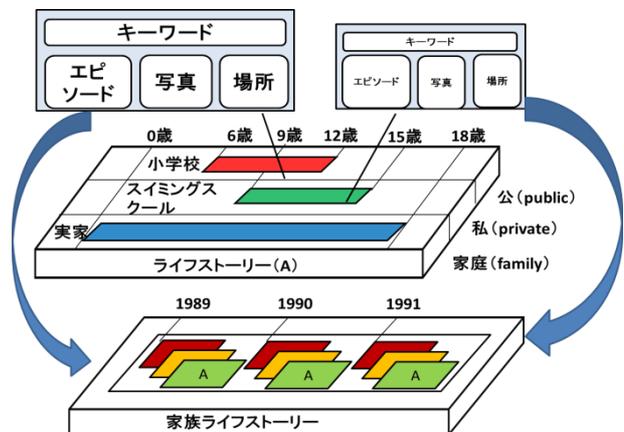


図3 ライフストーリーの作成例

5. あとがき

本研究では、コミュニティ情報を用いたライフストーリーを作成し、さらに比較や特徴的な出来事抽出を行い新たなライフストーリーを作成することで、思い出想起やコミュニケーションの円滑化に取り組んでいる。

- (1) ライフストーリーの比較方法について
- (2) 大量な作業による負担の増加について

今後、上記2点について検討する。特に、本研究は認知症者を含んだ家族を対象とした研究であるため、負担の少ないインタフェースの開発が必要である。

参考文献

- [1] 内閣府,高齢社会白書,平成22年度版,pp.2-3.
- [2] 山崎,仲谷:思い出を用いた認知症者と家族介護者間におけるコミュニケーション支援,情報処理学会74回大会(2007).
- [3] Butler RN: The life review; An interpretation of reminiscence in the aged, *Psychiatry*, 26, pp.65-75 (1963).
- [4] 橋本,仲谷:思い出構築閲覧システム[your Story]の評価,情報処理学会第69回大会(2007).